

『吾輩は猫である』反撃

Junko Higasa 2016.4.17

1906年1月同時発表の第七章と第八章には、大町桂月の名前が登場する。これは前年10月6日に刊行した『吾輩は猫である 上編』に対する桂月の批評が、12月1日刊の『太陽』に掲載されたためである。

その内容は「夏目漱石は、猫で売り出して、最近文壇の流行りっ子である。『吾輩は猫である』は、文壇の単調を破った未だかつてない滑稽物である」この冒頭はよいが後が悪い。「歯切れのよい文章であるが、日常の滑稽を連ねただけで小説としてまとまった筋はない。滑稽物として滑稽足らず、風刺が極めて少ない。詩趣ある代わりに稚氣免れず、未だ傑作と評すべきものではない」これで漱石は憤慨した。そこで批評が出て間もなく、友人、門人たちに反撃記述書簡を送り、さらに当の作中で公表反撃した。

第七章では、批評文中の「酒、道楽、旅行、社交を以て趣味を広めたほうがいい」に反撃する。その最たるは、苦沙弥の細君の『桂月って何です』の言葉だろう。世間で有名な『猫』は知っているが、「桂月」の人間たるを知らない言葉である。

そして第八章では、金田が中学生を動かして教師生活に球を打ち込むことと、批評家が読者を動かして作家生活に弾を打ち込むことを掛けている。吾輩は桂月の言うように、単純に日常を面白可笑しく書いているわけではない。その中の連綿たる真理に気付かぬなら、金田や中学生並みのレヴェルであろう。